太宰治「むかしの亡者」ならびに掲載誌『かむろ』をめぐる一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1458

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

太宰治「むかしの亡者」ならびに掲載誌『かむろ』をめぐる一考察

須田喜代次

はじめに

本学に「昭和十三年十一月廿五日　印刷納本、昭和十三年十一月廿七日　発行」の奥付を持つ雑誌『かむろ』第二冊が所蔵されている。後に詳述するが、この『かむろ』なる雑誌、その奥付によれば「(百部限定)」ということで、ごく少部数の発行であったらしく、現在昭和十三年八月七日発行の創刊号から昭和十四年四月二十五日発行の第三冊まで、都合三冊の発行はその存在を確認することができるが、全部で何号発行されたのかは分からない。その三冊のうち本学が所蔵するのは、右に述べたとおりその第二号に当たる「第二冊」のみなのだが、その『かむろ』第二冊に、太宰治の「むかしの亡者」なる作品が掲載されている。本文のみ四百字強、つまり四百字詰め原稿用紙にしてちょうど一枚といった程度の短い作品なのだが、この作品、従来の太宰治全集未収録である上に、諸年譜にもその存在の記載が見当らない。

すなわちこの作品は、これまでその存在すら知られていなかった作品ということになりそうなのだが、作品発表時間である昭和十三年秋といえば、それは太宰治という作家にとって、一つの大きな転機となる〝時〟だったということになるはずである。周知のことをお浚いしておけば、この年昭和十三年九月十三日、井伏鱒二の勧めで山梨県河口村御坂峠の天

下茶屋に引き移った太宰は、同年十一月十六日に甲府市内の下宿に移るまでそこに滞在した。そしてこの間に彼は、後に夫人となる石原美知子と見合いをし、その結果として翌十四年一月の二人の結婚に向けて事態は動いていた。「太宰も、このごろは、多少、屹つとなつて居ります」（昭13・10・17、山岸外史宛書簡）という太宰自身の発言が残っている所以である。作品「むかしの亡者」の脱稿時期はもちろん不明[1]だが、発表時期から勘案して、右の御坂峠時代に書かれた可能性が高いのではないだろうか。

そのこと一つをとってみても、ただ単に全集未収録だからということだけでなく、昭和十三年秋という時間と作品を書く太宰治ということを考えるとき、たとえ短文であるにはせよ、この作品はやはり太宰作品史にとって見過ごしがたいものを持っていると言っていい。

以下そうした観点から、当該作品の紹介と、合わせて作品掲載誌である『かむろ』についての報告、ならびに若干の考察を試みてみたい。

I

まず当の「むかしの亡者」という作品であるが、それは次のようなものである。

むかしの亡者　　太宰治

むかしの花火つくりの名人は、玉が破裂するときの音について、最も工夫をこらしたといふことで、実はそのことを書かうと思つてゐたのだが、それよりも、むかしの幽霊のつくつた歌のことを書くことにしました。このはうが面白いかも如（ママ）れない。

こひしくばたづね来てみよ出水なるしのだの森のうらみ葛の葉、これは誰でも知つてゐる。雌の狐の歌である。う

らみ葛の葉に畜生のあはれを感ずる。吉原のおいらんが蚊帳の中で熟睡してゐるなじみ客を殺して自分も死んだ。さうして、わぎもこをいとほし見れば青鷺や言の葉なきをうらみざらまし、と残した。はつきり意味のとほらぬ故にかへつて悲惨である。一子をのこして死んだ若妻の幽霊が、浪人の夫の枕もとに短冊を置いていつた。闇の夜のにほひ山みちたどり行きかな泣くこゑに消えまよひけり。かなは女児の名である、にほひ山みちは、冥土にある山路の名であらうか。消えまよひけりも、若い女の幽霊らしく、あはれである。

以上で全てである。もちろんこれだけの文章にあまり大きな意味付けをすることは、慎まなければならない。しかしはっきり言えると思うのは、たとえば『かむろ』第二冊誌上で、この太宰作品と並んで見開きで掲載された秋庭俊彦[2]の次のような作品に色濃く反映している時代の〝色〟に、太宰の作品は徹底して染まっていないということだ。

靖国神社臨時大祭　　秋庭俊彦

燎火消ゆ英霊神の闇に在す
神の闇お翼ゆく楽奏づ
闇の畏さ幄舎の背族（うから）たゞかしわ手
吹奏裡おさなきものゝ声泣ける
捧げ銃征戦つゞく天をさし
御榊の夜風眼に泌む秋の夜なり

昭和十三年、日中戦争は泥沼化の一途をたどっていた。おそらくは「むかしの亡者」執筆の時期と相前後するに違いない同年十月二十七日、八月から展開していた武漢作戦の結果として日本軍は武漢三鎮を占領するが、それは戦争の長期化に繋がるものに過ぎなかった。[3]その武漢作戦に「わが文壇総動員のペン報告団」（昭13・8・24、『東京日々新聞』）の一員として海軍従軍部隊に参加していた佐藤春夫は、十月十一日に帰国しているが（出発は九月十四日）、そのときの産物な

のだろうか、やはりこの『かむろ』第二冊にこんな句を寄せている。

九江にて

香爐峯の敵はいかにぞ秋晴れぬ

前線即事

濁流に機雷漂ひ秋暑し

記念撮影

見交すや戦闘帽の日やけ面

前年昭和十二年八月に閣議決定された「国民精神総動員実施要綱」、そしてこの年四月に公布された「国家総動員法」は、そうした戦時色の蔓延に一層拍車をかけるものでもあったに違いない。(4)

しかるに、先の太宰の文章の基調はそうした時代のベクトルとは全く違う方向を向いている。そのような「今」に対して、あえて「むかし」の亡者の話を書く太宰ということは注目しておくべきことなのではあるまいか。

さらに、けっして傑作ではない、名もない遊女や若妻の歌を、それ故にかえって「悲惨」「あはれ」と見る目線は、たとえば翌年初め（『文体』昭14・2・3）に発表される「富岳百景」の中の、「麓の吉田のまちの、遊女」に対する「私」のそれに繋げてみることもできるのではないだろうか。

やはりここには昭和十三年の現実を生きる太宰の、作家としての姿勢が刻されている。

Ⅱ

では、その「むかしの亡者」の発表舞台となった『かむろ』というのはどのような雑誌なのだろうか。そしてその雑誌

と太宰との接点は、奈辺にあるのだろうか。

前述したように本学が所蔵するのは『かむろ』の第二冊のみなのだが、その奥付に記された「百部限定」を裏書きするように、現在同誌を手にすることはなかなか難しい。すなわち、学術雑誌情報センター編の『一九九一年版　学術雑誌総合目録　和文編』〈丸善株式会社〉によれば、当該誌『かむろ』の創刊号から第三冊までの三冊を所蔵している機関は日本でただ一箇所、日本大学総合学術情報センターのみである。(5) 今回日本大学のご好意により、その三冊を閲覧することができた。そこで、閲覧させていただいた本学所蔵以外の二冊のことを含めて、判明したいくつかの点を報告したい。

まず創刊号であるが、それは「昭和十三年八月五日　印刷納本」、「昭和十三年八月七日発行」と奥付に記載がある。発行者は「世田谷区世田谷2／2.045　禿　徹」。『かむろ』という一風変わった誌名は、この発行者「禿（かむろ）　徹」に由来するものであることが分かる。編輯者としては「豊島区千川町四三五四　澤田卓爾」の名が記されている。因みに印刷所は「牛込区薬王寺町三三　伊勢印刷所」、頒価は「参拾銭」。

まず巻頭に置かれた「創刊之辞」を見ていってみよう。

同好の知人に読んでいただくために、俳句と短文の雑誌「かむろ」を創刊しました。日本特有の文学精神によつて、時節からのジャーナリズムとは正反対の立場から、手細工の民芸品でも作るやうな、のんびりとした気持で、月々編輯する趣味の小雑誌であります。余りにも翻訳的な、余りにも模倣的な、無用の装飾に富む現代の日常生活に正しい伝統意識を押しひろげて、然る可き国粋趣味を普及させる其の一つの方法として、秋声会風の平易通俗な俳諧を再興すると同時に又、也有、南畝の清明流暢な文章を手本として、口語の俗体を出来るだけ分り易く、而も文学的に改善し、洗練すること、等々が、此の雑誌を発行するに至つた私たちの抱負であります。更に語を換へて私たちの意図するところを抽象的に小むつかしく申せば、過去何千年に渡つて今日に及ぶ歴史の表に、種々様々な伝統を作りながら、日本民族としての本然的な文化生活を向上させてゐる精神活動の中に、動き動かされつゝ、私たちは、私たちの

観点から身辺の諸関係や日々の経験を好ましき表現にまで整理し、統一しようと云ふのです。

無人の経営ではあるが、雑誌を出す以上は、必ず何か独創的なものをお目にかけるつもりです。此の創刊号を発行するに当つて、特に小誌のため題簽を賜はつた永井荷風先生の御厚志に、而して又玉稿を寄せられた諸先生の御同情に衷心感謝する次第であります。

「余りにも翻訳的な、余りにも模倣的な、無用の装飾に富む現代の日常生活に正しい伝統意識を押しひろげて、然る可き国粋趣味を普及させる」等々の文面には、時代の〝色〟の浸透を見ることができそうだ。さて、その創刊号には次のような人々の寄稿がある。百部限定の小雑誌であることを考えると、錚々たるメンバーと言っていいだろう。

句	永井　荷風
句	佐藤　春夫
句	内田　百閒
春　夏	室生　犀星
夏　草	大鹿　卓
梅雨期	秋庭　俊彦
夏　書	禿　　徹
出前持ち	井伏　鱒二
若いアランの蒐集	橋口　康雄
売れぬ為恭	島田　訥郎
乗越し	愛　鳳　生
食　餌	秋庭　俊彦

諮　請　　二宮　守人
蔵票偶感　　禿　　徹
近版随想　　光　雲　居

続いて第二冊以降の内容も列挙してみる。

・第二冊　「昭和十三年十一月廿五日　印刷納本」。「昭和十三年十一月廿七日　発行」。発行者・編輯者は創刊号に同じ。印刷所は「牛込区薬王子町三三」と住所は創刊号記載のものと同じものの、社名は「明正社印刷所」となっている。

幼　年(6)　　田中　冬二
句　　佐藤　春夫
嵯峨の秋　　松尾いはほ
月　　松尾　静子
秋のいろざし　　野村　喜舟
靖国神社臨時大祭　　秋庭　俊彦
むかしの亡者　　太宰　治
ヘーシオドスの星　　野尻　抱影
堂庵紋付ばなし　　谷中　安規
狛　犬　　雲山荘主人
名前で損をする話　　禿　　徹
近版随想　　光　雲　居

・第三冊　「昭和十四年四月廿四日　印刷納本」。「昭和十四年四月廿五日　発行」。発行者・編輯者・印刷所は全て第二冊に同じ。

句	田中貢太郎
句	岡崎清一郎
句	秋庭　俊彦
癡人狂歌	佐藤　春夫
誦　名	竹友　藻風
夢	島田　謹二
華麗島古代蕃歌	西川　満
青き頸	大鹿　卓
愛村行	狐狸豚野天
おだまき	愛鷺老人
メートル法	禿　徹
近版随想	光　雲　居

頁数は雑誌中に記載がないが、全十四頁で、これは三冊を通じて変わらない。先の「創刊之辞」にも触れられていたように、題簽は荷風筆、表紙は島田納郎（これは雑誌編輯者、澤田卓爾のペンネーム）[7]描く空豆（？）と思われる絵、そして裏表紙やカットにはあの「奇行飄逸の」（『近代日本美術事典』〈講談社〉）版画家、谷中安規[8]の版画が使われている。このスタイルも三冊を通じて変わっていない。しかも手漉きと思われる和紙を使用して雑誌は作られており、さらには一冊ごとに紙の地の色を緑（創刊号）、紅（第二冊）、茶（第三冊）と変える念の入れようである。つまりは執筆メンバーを

含めて、これはたいへん贅沢な雑誌と言わざるを得ないのだ。

※　　※

ところで、荷風が題簽を書くというのも珍しいことだと思うのだが、このことに与って力あったのは編輯者澤田卓爾であったと考えられる。なぜなら、雑誌発刊二ヶ月前の昭和十三年六月七日、荷風のもとを澤田が訪れ、新雑誌『かむろ』発刊の計画を語ったことが、「断腸亭日乗」によって確かめられるからである。

澤田卓爾君来たりて俳諧雑誌かむろ創刊の計画を語る。

先の「創刊之辞」にも顕著だった、『かむろ』の「俳諧雑誌」という性格はこの時点ではっきりと定まっていて、荷風にその旨伝えられている。おそらくはこの日に、あわせて題簽執筆の依頼もなされたのではなかったか。澤田は荷風にこうした依頼ができるほどには、当時すでに親しい交際を荷風と結んでいた。彼が荷風と初めて出会ったのは、この時を遡ること六年、昭和七年九月十九日のことである。場所は銀座、荷風なじみの喫茶店「万茶亭」でのことであったようだ。

晩餐の後万茶亭に往き珈琲を喫す。神代氏来たり澤田卓爾氏を紹介す。（「断腸亭日乗」）

仲介者があの帚葉神代種亮であったことも興味深い。澤田も後にその出会いの頃を次のように回想している。

その頃（昭和七年八年の二ヵ年にわたって）私は屢々銀座で、荷風先生に親しく御目にかかっていました。先生は毎日のように三四時頃銀座へ出て来、万茶亭と称するコーヒー店に立ち寄られて、いつも先生の周辺に集る知人たちと落合うと、其処に腰を据え、彼等を相手に（私もその一人であった）雑談に耽けるのでした。（略）この集りの中に毎日欠かさず姿を見せ、荷風先生の自任番頭の資格で、まめまめしく先生に付き纏う蓬頭垢面の薄ぎたない人物がいました。それは余人ならず校正の神様として文壇に名を知られていた神代種亮翁でした。（「荷風追想」『荷風全集第二十二巻　月報』昭38・5、〈岩波書店〉）

新版『荷風全集　第三十巻』（平7・8、〈岩波書店〉）に付された「『断腸亭日乗』索引」によれば、澤田卓爾は昭和七年の初登場から昭和二十四年八月まで、全部で三十回余荷風日記に登場しており、その親密の度合いを知ることができる。書簡も戦後のものが三通全集に収録されている。さて、その澤田卓爾だが、昭和七年十月十四日の「断腸亭日乗」に彼の職業が書き込まれていた。

夜銀座オリンピクにて偶然澤田卓爾日本大学教授（略）に逢ふ。

澤田卓爾また、日本大学に因縁の深い人物であった。早速日本大学人事課に問い合わせ、差し支えない範囲で在職期間とその専門分野とをお聞きしたところ、次のようなご教示を得た。

すなわち彼は、昭和三年四月から日本大学高等師範部講師（英語担当）であり、昭和二十一年十二月より同二十七年三月まで日本大学予科教授であったとのこと。その際さらに彼が、明治四十二年六月にアメリカ、スタンフォード大学を卒業していることも合わせて教えていただいた。つまり荷風がその若き日アメリカに滞在していたときに、澤田もまた、場所こそ違えアメリカの地に滞在していたことになるわけである。[9] こんなことも、澤田と荷風を近づかしめた一因であったかも知れない。

創刊号巻頭を飾った永井荷風・佐藤春夫・内田百閒の句をあげておく。

石菖や窓から見える柳ばし　永井荷風
盛なり学校園の夏の草　佐藤春夫
独り居や梅雨寒の窓白々と　内田百閒

荷風の句は昭和二年六月『苦楽』初出、この年昭和十三年七月十日に岩波書店から刊行されたばかりの作品集、『おもかげ』の最後にかかげられた「自選荷風百句」に収められた句である。

※　　※

荷風を引っぱり出したのが、澤田卓爾だとすれば、三号全てに作品を寄せている佐藤春夫を引っぱり出したのは、おそらくは禿徹であったろう。なぜそう考えるかというと、実は禿の手になる一冊の翻訳書からなのである。それは昭和九年七月十七日に刊行された、ウットベリイ著・禿徹訳の『文学概論』（東学社）という書物だ。[10] これはアメリカの批評家George Edward Woodbeerry（1885～1930）の“The Appreciation of Criticism”（1907）を翻訳したものなのだが、実はその書名である『文学概論』が「佐藤春夫先生　題簽」なのである。ということは、禿と佐藤春夫との関係は、おそらくは澤田と荷風との関係に近いものがあったであろうことを推測することができる。ところが、残念ながら澤田と違って、この禿なる人物に関しては、現在のわたくしには右のこと以上のことが分かっていない。大方のご教示を仰ぐ次第である。

Ⅲ

発行者である禿徹、ならびに編輯者である澤田卓爾に関して現在までにわたくしが調べ得たことは以上の通りなのだが、先の問題に戻って、では太宰との接点はということになると、その繋がりは見出しにくい。

ただ創刊号に関して注目すべきは、太宰と関わりの深い井伏鱒二がその作品「出前持ち」（後に『蛍合戦』昭14・9、〈金星堂〉に収録）を寄せているということである。もしこの雑誌と太宰との繋がりを考えるとすれば、この井伏の介在あたりではないだろうか。先に述べたように昭和十三年のこの時期、天下茶屋へ呼んだこと、結婚問題等々、井伏は太宰に深く関わっていた。「第三冊」に見える、井伏に親しい田中貢太郎の寄稿[11]も視野に入れて、ここではひとまず井伏の仲介を想定しておきたい。

もちろん、となれば井伏と禿あるいは澤田との繋がりは、ということに当然なるはずで、これに対してもわたくしははっきりとした答えを用意できていない。ただ、澤田卓爾は先に述べたスタンフォード大学入学前に早稲田の旧専門学校に在学していた。明治三十八年四月同校を中退してアメリカへ留学したようだ（いずれも前記日本大学のご教示よる）。すなわち彼は井伏の同窓、先輩（奇しくも「中退」ということも含めて）ということにはなる。

最後に『かむろ』が何冊まで刊行されたかという見通しについて述べておきたい。第三冊に掲載された「愛鷺老人」（ペンネームの類似からしてこれも澤田卓爾だろう）の「おだまき」という作品の末尾には「（以下次号）」とあり、また特に「終刊之辞」の類の文章はないことから、この時点での発行者・編輯者のもくろみとしてはまだ雑誌を継続する意志はあったようだ。しかし同号末に置かれた「メートル法」という文章の中で、禿が「今度の支那事変で名誉ある無言の凱旋をした私の村の吾一軍曹のこと」に図らずも話題を向けていることに端的に現れているように、時代はこのような贅沢な雑誌を出し続けることを難しくする方向に動いて行ったように思われる。だからおそらく『かむろ』は第三冊までで、第四冊は刊行されなかったのではあるまいか。

その貴重な一冊に、繰り返せば、昭和十三年秋、太宰はその作家としての姿勢を刻んでいたことになる。

注

（1）新版の『太宰治全集　別巻』（一九九二・四、筑摩書房）には、初めて太宰自身の手になる「創作年表」が写真版で掲げられたが、その一九三八（昭和十三）年の部分には「むかしの亡者」の記載はない。

（2）秋庭俊彦（一八八五・四・五～一九六五・一・四）は、明治四十三年早大英文科卒。新潮社版『チェーホフ全集』翻訳の仕事を残した。彼は『かむろ』編輯者の澤田卓爾と親しかったようだ。昭和十二年一月十五日の「断腸亭日乗」に次のような一文がある。

さくら屋に立寄るに沢田秋庭二君の来るに会ふ。秋庭氏は二十余年前三田文学の寄稿者なりき。其後多摩河畔に花園をひらき専菊と桜草とをつくると云ふ。

(3) 「……武漢作戦と広東作戦は、日本軍の戦線が伸びきってその限界に達したことを示すものであった。（略）そのため、大本営陸軍部は、省部（陸軍省、参謀本部）の共同決定として一一月一八日、「十三年秋以降戦争指導方針」を策定した。／この方針は、武漢・広東両作戦を機に持久戦に転移しようというもので、その内容はさらに、一二月六日の陸軍省と参謀本部の決定である「昭和十三年秋以降対支処理方策」によって具体的に示されている。」（藤原彰『昭和の歴史　5　日中全面戦争』〈小学館〉）

(4) 井伏鱒二に次のような文章がある。

そのころは（昭和十一年から十二年、十三年にかけて）私が相当に弛緩してゐた期間であつた。世情が急変してゐたときである。二・二六事件が起り、蘆溝橋事件が起り、国家総動員法が成立し、大政翼賛会の実践要綱が発表された。私は書くときの取材範囲を次第に縮かめられて行くやうになつてゐた。（「船津村の窯址」『神屋宗湛の残した日記』〈講談社〉所収）

(5) 正確に言うと、『学術雑誌総合目録』には所蔵先として「日本大学総合図書館」が記されている。日本大学に問い合わせたところ、現在はそこから「総合学術情報センター」に移管されているということであった。

(6) これは次のような詩である。

幼　年　　田中　冬二

——木枯の記憶——

目を醒ますと木枯は未だ荒れてゐた
母は夜延の仕立物をつづけてゐた
——お母さん　と呼ぶと私は二度やすらかな眠りに入つた

この作品は後に詩集『故園の歌』（昭15・7・30、アオイ書房）に「母」と改題し、さらに最終行を次のように改めて収録された。

母

——木枯の記憶

目を醒ますと木枯は未だ荒れてゐた

母は夜並の仕立物をつづけてゐた
——お母さん　と呼び母の応へるのをきくと
私は二度やすらかな眠りに入つた

(7) 澤田には、昭和二十二年三月刊行の作品集『黒衣の花嫁』(太平出版社)一巻があり、その中に『かむろ』創刊号掲載の「売れぬ為恭」「乗越し」、ならびに第二冊掲載の「狛犬」と、都合三編が収められている。ために雑誌の表紙絵も担当した「島田訥郎」、および「愛鷺生」、さらに「雲山荘主人」が彼のペンネームであることが分かるわけなのである。

(8) 谷中安規は、『かむろ』に関わった人々との関係で言えば、内田百閒『王様の背中』(昭9・6、楽浪書院)や、佐藤春夫『絵本FOU』(昭11・4、版画荘)の版画挿絵を担当している。

(9) 注(2)でも引用した昭和十二年一月十五日の「断腸亭日乗」に、先の引用部分に続く形で、次のような文章が綴られている。

又沢田君のはなしに目下好評の活動写真桑港の震災なるものを見たりしに、人物の服装市街の光景悉く震災当時のものに非らず、皆現代の風俗なり。活動写真の考証を閑却するは独り日本のみにあらざることを知りたりとなり。沢田君は当時桑港に在りて親しく災禍の状を目撃せし人なり。余は其頃紐育に在りき。明治卅八九年なるべし。

(10) 同書に付された「訳者序」の一部を次に掲げる。

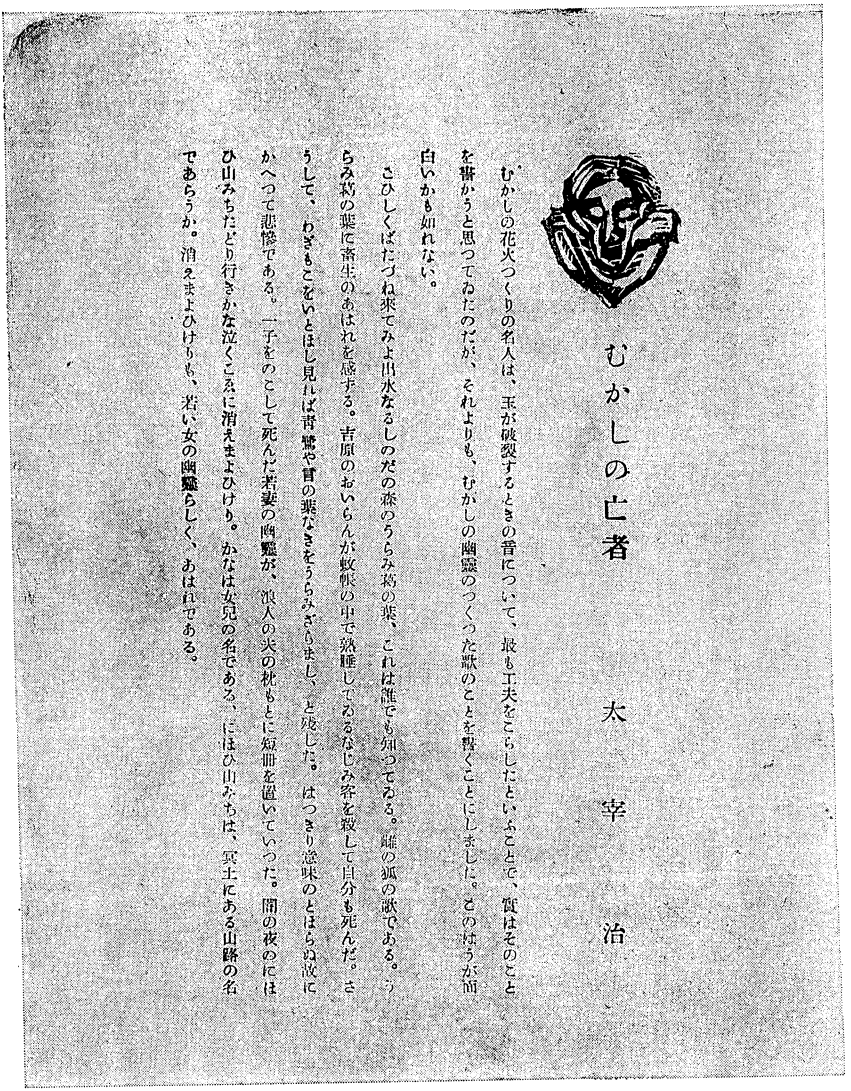
文学の「ABC」も弁へずに、お先走りの傾向文学でなければ、時世に遅れたやうに思つたり、或は又、学究の頑迷な衒学を、正しき批判と思ひ込み、徒に註釈、訓詁の末に走つて得得たる者は、共に文学を語るに足らずと云ふ可しだ。

(11) 田中貢太郎の句は、次の三句である。

うつろ心に師走の街の動き見る
ふと見れば指に師走の埃かな
戦死者の遺族もあらん師走人
やはり戦禍の影を見ることができる。

※本稿を草するにあたり、『かむろ』誌閲覧の機会を与えて下さり、また内容紹介の許可を与えて下さった日本大学総合学術情報センターの方々、並びにお忙しいところ当方の煩瑣な質問に親切にお答えご教示下さった日本大学人事課の方々、さらに問い合わせ先等をご教示いただいた日本大学短期大学部の戸塚隆子氏に感謝いたします。ありがとうございました。

『かむろ』表紙（約70％に縮小）



むかしの亡者

太宰治

むかしの花火つくりの名人は、玉が破裂するときの音について、最も工夫をこらしたといふことで、實はそのことを書かうと思つてゐたのだが、それよりも、むかしの幽靈のつくつた獣のことを書くことにしました。どのほうが面白いかも知れない。

こひしくばたづね來てみよ出水なるしのだの森のうらみ葛の葉、これは誰でも知つてゐる。離の狐の歌である。うらみ葛の葉に畜生のあはれを感ずる。吉原のおいらんが蚊帳の中で熟睡してゐるなじみ客を殺して自分も死んだ。さうして、わぎもこをいとほし見れば青鷺や冒の葉なきをうらみざるまし、と歌した。はつきり意味のとほらぬ故にかへつて悲慘である。一子をのこして死んだ若妻の幽靈が、浪人の夫の枕もとに短冊を置いていつた。開の夜のにほひ山みちたどり行きかな泣くこゑに消えまよひけり。かなは女兒の名である。にほひ山みちは、冥土にある山路の名であらうか。消えまよひけり蕊、若い女の幽靈らしく、あはれである。

『かむろ』第2冊、太宰治「むかしの亡者」掲載頁、（カットは谷中安規）